

特集Ⅱ 『多文化共生をどう捉えるか』の刊行

書評「多文化共生をどう捉えるか」

「希望を放つ知の希求」

大山 香

2010年代、国際社会における日本経済停滞の危機感から、国は「グローバル人材」を育成するため、英語教育の充実や海外留学体験の推進を強く大学に求めてきた。その流れで、宇都宮大学国際学部は、それだけが教育目標であれば学問の専門性が欠如し他大学との差別化を図れないと懸念し、特色をどう位置づけるか構想までに数年を要した。そして最終的に「外国語教育の充実を図ること」と同時に、「国際社会及び地域社会の多文化共生に関する学際的研究を一層推し進めること」と再定義し、その育成する人材像を、専門的知識・技術に加えチャレンジ精神や豊かなコミュニケーション能力及び行動力等を兼ね備えた「グローバルな実践力」とシャープ化した。

ここで、キーワードとなるのが「多文化共生」という言葉である。日頃、学問や異国文化になじみのない市民感覚からすれば、抽象的で今一つピンとこない言葉である。若干の疑問を感じつつ読み進めると、まず、本書は二部形式で構成されており、第一部は「言語、文学、心理、教育、情報、文化、経済、環境、開発、政治」を専門的背景とした教員がそれぞれの見地から多文化共生をエッセイ風に論じている。印象的だった内容をポイント的に紹介する。

1. 日本においても中国人作家が芥川賞を受賞するなど、世界的にも文学が多文化社会を先取りしているとの報告。
1. 思いやりや共感によって共生は達成される

のだろうかという命題。

1. 多文化共生を巡る問題は、経済問題とするところからの視座。
 1. (公害)被害当事者が救済されない政治・社会システムに対し、多文化共生のアプローチが不可欠であるとのまなざし。
 1. 国家が線引きや格差を制度的に生み出し、国際体制自体に異質な他者を認識させる枠組みが設定され、多文化共生は困難であるとの指摘。

など読み進めていくと、多文化共生の概念が広範囲に及び異分野を横断する非常に包摂的な言葉であることがわかる。

第二部は、地域や研究対象がより限定的に紹介されている。タンザニアは、複数の民族が共存している国だが、政府は国勢調査をしていても宗教や民族について調査をしていないという。数値を明らかにすることで政治的な影響が少なからず出ることを防ぐためである。大多数が同一民族で、徹底した管理社会に住んでいる日本人には想像つかないことである。またアパルトヘイトに反対し27年間投獄された人物が大統領になり、白人と黒人の融和を目指した南アフリカの国土世間や指導者資質も、日本では全く考えられないことである。台湾の歴史からは日本人の無自覚を、小笠原諸島は僻地のイメージとは裏腹に、若い移住者が増え活気があるなど紹介しきれないが、無知であることを自覚せずにはいられない。特に、共生を実現するためのヒントとして痛切な自己認識の到達と転換が必要ではないかと言う思索(SF映画を通し)や、日本で50年以上も生活している在日韓国・

朝鮮人のオールドカマーは、納税など国民的義務を果たしているものの地方参政権すら与えられず「排除」に貫かれていると指摘するアジア人研究者には共感を覚えた。

この本を読むと、多文化異文化共生とはどのような問題があり、どのようなことなのか、自己変革の重要性も浮かび上がってくる。そして想起させたのは、反知性主義に対する抗いである。今、巷には反知性主義という言葉があふれているが、日本は政治の影響を社会がダイレクトに受け言論空間は一元化しやすい。白井聡の言葉を借りれば、反知性主義の核心には、「知性の本質的な意味での働きに対して侮蔑的で攻撃的な態度¹」があり、深刻なのは反知性主義が民主政治のエートスになっていることである。AIが人間にとって代わる社会が予測

され、経済力の有無が人間の優劣を決定するような希望を持たない時代に突入している。そのような時代背景にあって、この一冊は宇都宮大学国際学部の矜持がうかがえ、希望を放つものである。安穩ではなかった「平成」も終焉し、新元号を迎える日本は、外国人労働者が拡大する流れになっている。真に求められている社会や人物像—それは、多文化共生の道を進むしかなく、相手を真摯に理解する謙虚な姿勢や「断定より先に自己への懐疑の精神を起動させること²（主意）」が何より大切ではないかと考えさせられた。その実現のために学部長、センター長を始めとする教員たちの並々ならぬ意気込みと熱意が伝わってきた。筆者も、多文化共生のために真摯で謙虚な姿勢を見失わないよう自戒していきたい。

1 内田樹編『日本の反知性主義』（晶文社、2015）65頁～67頁（白井聡「反知性主義、その世界的文脈と日本の特徴」）

2 1に同じ 300頁（鷲田清一「摩擦」の意味）

「国際学部のグローバルな射程」

駒井 洋

宇都宮大学国際学部は2017年度から国際学科1科に改組されたが、それにともなって「多文化共生」を学部共通の教育目標として掲げた。それに資するために本書が企画されたのである。エッセイ31本とコラム8本とからなる本書は、国際学科および留学生・国際交流センターの教員34名により執筆されている。エッセイは、「多文化共生を学際的に考える」と題される第1部と、「多文化共生を国際的に考える」と題される第2部とから構成されている。第1部は、言語・文学4本、心理・教育・情報・文化4本、経済・環境・開発・政治5本の3部門からなり、第2部は、アメリカ~ヨーロッパ6本、アフリカ~中東~アジア~環太平洋6本、日本6本の3部門からなっている。

ここでは、本書のエッセイおよびコラム39本のなかから評者の関心をひいた7本をとりあげ、諸条件、諸戦略、文化の3つのテーマに大別して論述することとする。

(1) 多文化共生国家をつくるための社会・政治・経済などの諸条件

藤井広重による「虹の国の歩みから考える共生の社会」では、アパルトヘイト政策で悪名高かった南アフリカにも変革の機運が高まり、27年間も投獄されていたネルソン・マンデラが1994年に大統領に就任した。マンデラは南アフリカを虹の国にたとえ、白人に復讐することなく、黒人と白人との和解と融和を試みたのである。

阪本公美子による「アフリカにおける統治と多文化共生—タンザニアはどのように安定を保ってきたか」によれば、1964年に成立したタンザニアは、ウジャマー集村化や、スワヒリ語の国語としての推奨などを特徴とする、アフリカ社会主義を実施した。この集村化は、異なる

民族がひとつの村で共存する状況をつくりだし、また西洋言語でないスワヒリ語の使用により、民族間のコミュニケーションが容易になるなど、安定した政治状況がもたらされた。

(1) 多文化共生に指向する諸戦略

マクロな戦略について。重田康博による「グローバル市民社会の意義—多文化共生社会の再構築」をみると、近年、各種の社会運動団体などから構成されるCSO（市民社会組織）の重要性が高まっている。CSOやNGO・NPOなどから構成されるグローバルな自立的公共圏がグローバル市民社会であり、それに依拠することによって、人びとと社会の崩壊を修復し、共生する社会を実現していく多文化共生の再構築が求められるとする。

ミクロな戦略について。田巻松雄の「外国人生徒入試」によれば、宇都宮大学国際学部は、2016年度入試より、国立大学では初めての試みとして、外国人生徒にたいして特別入学枠を設ける「外国人生徒入試」を開始した。田巻は、外国にルーツのある学生のなかに、日本人学生にはない力強さとポテンシャルを感じている。入学者は、グローバルに活躍し世界の文化交流に貢献できる人材となることが期待される。

合理性にもとづく戦略については、モリソン・バーバラの”Rationality and Multicultural Public Spheres”（「合理性と多文化的公共圏」）が興味深い。筆者は高野山の宿坊のひとつ桜池院での、宿泊客をめぐるスタッフと僧職とのあいだの関係を素材としている。この多文化的公共圏においては、おのれと他者の考え方について批判的であり公正でありかつ理解しようとする、すなわち合理性をもつことが、宿坊の経済的利益とともに仏教的儀礼や参拝の達成を可能にする。

(2) 文化的諸側面

スエヨシ・アナによる”Latin American Ethnic Diversity: A Squandered Historical Opportunity”

（「ラテンアメリカにおけるエスニックな多様性—浪費された歴史的機会」）は、ラテンアメリカでは主流文化の押しつけにより、さまざまな移民集団の文化的伝統が薄められ、価値のある文化的資産が失われたとする。この主張の背景には、ペルーにおける日系移民の文化の希薄化についての筆者の慨嘆があると推察される。

大野斉子の「亡命ロシア人とモダニズム」によれば、20世紀初頭のロシアはヨーロッパにおける文化の先進地域であったが、ロシア革命に

より旧体制の支配者層、知識人、芸術家たちなど百数十万人にのぼる白系ロシア人が、ヨーロッパ地域、東アジア、南北アメリカなどに亡命した。その文化はモダニズムの洗礼を受け、現代の文化の淵源となった。

本書にみられるように、宇都宮大学国際学部の教員がもっているグローバルな射程には驚かされる。それはエスニックな多様性ばかりでなく、研究内容にも現れている。

「多文化共生について教える旅の指南書」

石川 朝子

本書は、執筆者の一人である田巻氏のことばを借りれば、日本から旅立ち、世界各地を多文化共生に関わる事例を通して巡ったのち、日本に戻ってくるという構成となっている。執筆者が読者に、多文化共生について語りかけたり、考えさせたりしながら「多文化共生をめぐる旅」に連れていくというスタイルである。しかし、ただ多様な地域における事象について知る旅に出かけるだけではない。同時に、多岐にわたる研究分野において、どのような考え方が大切にされているか、また課題とどう向き合っているかを知りながら読み進めることができる。さらにコラムでは、宇都宮大学における多文化共生に関わる教育実践や活動について紹介されていたり、英語によるコラムが用意されていたりと、全体として充実した読み物となっている。

読みながらただただ、宇都宮大学国際学部の学生が羨ましいと思った。というのも、本書は多様な教授陣の専門領域やテーマに触れ、多文化共生をめぐる様々な課題を理解し、大学で学ぶ意欲が十分に刺激されるようになっていく。研究者の方々のバックグラウンドや研究を始めたきっかけなど、研究テーマに対する熱い思いも読み取ることができるからだ。私が学生であれば、読後に本書を握りしめ、すぐにでも研究室のドアをノックすることだろう。しかし、本書は決して学生向けに編まれたのではない。より良い社会や地域、国家のあり方に興味を持つ一般の読者、そして研究者へ、多文化共生について多角的に考える必要性と面白さを伝えてくれる一冊である。

それぞれの内容も、各執筆者の豊富な学問的経験に裏付けられた、リアルな多文化共生の姿と共生の難しさ及び限界、またそれらの課題に

研究者としてどのように向きあってきたか、わかりやすく綴られている。執筆者の方々の事象に対する深い洞察と多文化共生についての考え方に深く傾きながらエッセイを読み進めた。

研究の分野やテーマの多様性に注目するだけでは、本書の魅力は半分も理解したことにならないのではないか。エッセイ31編と8つのコラムからなる多文化共生をめぐる旅路の中で私が学んだことは、大きく分けて次の4点である。多文化共生について考える際に、第一に、自文化内にも多様性が存在していること。第二に、マジョリティ側の固定観念を変えていく必要があること。第三に、マイノリティ（とされている）の人たち自身の持つ力に注目すること。最後に、多文化共生の実現は難しさを孕んでおり、一筋縄ではいかないこと、である。

さらに、各エッセイで扱われている事例や内容はそれぞれ異なるフィールドに基づくものであるが、本書を貫いているいくつかの「軸」があると気づいた。それらは、人権、格差、差別、対等な関係性、承認、弱者の社会参加、支配的なものへの異議申し立てなどについての共通の構えである。本書を読み終わって、私自身も、この書籍を貫いている上記の「軸」を大切に研究していきたいと思っていることを再確認することができた。

私は、教育社会学的な視点から日本に住む外国にルーツをもつ子どもの研究に携わっている。特に、オールドカマーといわれる華僑華人の子どもたちが通う中華学校を主なフィールドとしている。一方で、大学院生時代には関西の国際交流協会で、ニューカマーの子どもの学習支援にも関わってきた。現在は、高校を卒業したニューカマーのその後を知るために、研究グループで追跡調査を行なっている。一般的には、似たようなテーマに関心のある、同じ学会に所属する研究者が集まって研究することが多いのだが、ことあるごとに言語学・心理学・政

治学・人類学・歴史学など様々な視点を付き合わせて事象に迫る必要性を感じている。また、他国・地域との比較を行うことも、研究手法として必要になってくる。

このように学際的な研究が求められて久しいが、多文化共生に関する研究がどこまでその理想に近くできているだろうか。本書は、多文化共生について多様な視点から考えることの重要性を提示するだけでなく、そのことに向き合う多くの研究者が宇都宮大学に存在し、上述した「軸」となる価値観を共有しながら、仕事をしていることを伝えている。つまり、研究組織としての力強さをも伝えているのである。

一般的に孤独と言われる研究者にとって、仲間がいると思えることほど心強いことはない。

最後に一つだけ欲をいうと、各テーマが4頁ずつと短く設定されており、エッセイとはいえ物足りない感じがした。各テーマの重要な部分に入り、ワクワクし始めたときにはすでに終わりが迫っている。しかし、執筆者の方々は、限られた紙幅の中で、多文化共生と自らの研究及び学問テーマがどのような関連性にあるのか、凝縮して書いておられた。これは、引き続き読者自身がそのテーマについて考えられるように、問いを開いているようにも思える。これも、本書の狙いなのではないか。

「どのページから読んでも興味深い一冊！」

加藤 佳代

宇都宮から約120km、神奈川の地で「多文化共生」を希求し、実践を試み、壁にぶつかり、転び、掴んだ砂利をぐっと握りしめて立ち上がる…そのような経験を繰り返してきました。

「多文化共生とは何か」という問いに常々思いを巡らせてきた私にとって、この本は新たな気づきと、発想を転換する契機を与えてくれます。

多彩な教授陣が各自の専門性を活かして提示する、多文化共生の捉え方の数々。ページを繰るたびに、未知の概念、示唆に満ちた言葉が目飛び込んできます。印象的なフレーズをいくつか挙げます。

- ・「支配的なモノリンガルズムから抜け出さなければ気づけないような側面が《多文化共生》にはある」（「多文化共生にモノリンガルリズムは似合わない」 p.22）
- ・「在日外国人に理解を示し、多文化共生社会の構築を目指す関係者たちも、さまざまな過去を背負って日本という異国の地で生きていかねばならぬ外国人たちの内なる現実には触れていない」（「多文化社会を先取りする文学」 p.26）
- ・「共感が、他の集団に対する敵対的感情や行動の源になりうる」（「社会的共生と共感－共感の反社会性について考える」 p.43）
- ・「自分の周りに緩衝空間があるとイメージすることは、自己を侵食され、損なわれる恐怖が攻撃性を生むことを避ける助けになるかもしれない」（「日本で考える多文化共生－多文化の現実、共生の理想」 p.55）
- ・「自分たちは迫害されていないから何もしない「多数派」の人々であっても、いつ線引きの「向こう側」に追いやられ、迫害されるかわからないという不安を常に抱えなくてはな

らない社会が、多文化共生に失敗した社会である」（「多文化共生はなぜ実現が困難なのか－主権国家体制の限界について」 p.82）

- ・「日本人と外国人という二項対立から脱却し、日本人の女性、障害者、低所得者や性的少数者なども含み得る多様なマイノリティとの共生の在り方を志向していく概念へと昇華されなければならないのではないだろうか」（「真に求められるグローバル人材とは－アメリカの多文化主義と日本の多文化共生を踏まえて」 p.103）
- ・「モノリンガルで育つことを暗黙の、そして当然の前提とした教育では、複数言語で育つこどもは、その言語的なルーツや経験を評価されず、授業言語が母語でないことのハンディキャップのみを負うことになる。一般にそのような状況の中で、例外的にマルチリンガルな教育の萌芽を含む実践もドイツにはあった」（「教育における多文化共生－ドイツにおける母語教育の展開を題材として」 p.110）
- ・「中東の平和維持と他者理解促進の間には全く関係ない。また、他地域でこの関係が証明されたこともない。にもかかわらず、こういった解釈がすぐに成立してしまうことそれ自体が、かなり深刻な問題が存在することを示している」（「ダマスカスで」 p.134）
- ・「移民が経験する社会経済的格差が、移民の文化的アイデンティティを強化することは良く知られている」（「ハワイ島在ミクロネシア自由連合移民の合同卒業記念日」 p.146）
- ・「台湾は、言語、歴史認識等の多元性が社会的な対立や軋轢を生むという社会構造を常に抱えており、それら多文化の併存とその共生は大きな課題であり続けてきた」（「台湾における多文化共生と帝国日本」 p.148）
- ・「日本最大の「僻地」といえる小笠原から見ることにより、多文化共生という概念を、

より広くとらえることもできるのである」
（「小笠原における多文化共生」 p.156）

- ・「国際協力において政府間の支援、国連やNGOを通じた支援、企業活動における支援、個人的な支援に関わらず、重要な視点はお互いの生活や文化を尊重し、支え合う多文化共生の視点である」（「災害弱者と多文化共生」 p.157）
- ・「日本語」の内部にはすでに諸言語、諸文化との融合がみられ、多様な「地域」性が入り込んでいるといえる」（「多文化共生に向き合うための自文化理解－日本語をみつめなおす」 p.164）
- ・「共生の定義に含まれる「対等な関係」の前提となる法制度の整備がいっこうに進んでいないのである。このようにオールドカマーへの処遇は、日本文化への「同化」と「排

斥」の論理に貫かれている」（「多文化共生の理念と現実」 p.172）

- ・「外国人生徒の高校進学を支援するためには、適格者主義のような選別主義ではなく、進路を保障する（学ぶ場を与える）という発想への転換と実践が強く問われている」（「外国人生徒への学びの場と進路の保障－多文化共生を担う次世代支援」 p.176）

これらを読むと「もっと突っ込んで聞いてみたい。学びたい」という気持ちが湧いてきます。同書に登場する教授陣とキャンパスで、教室で、出会い、言葉を交わし質問できる宇大生は羨ましい…そんな思いに駆られます。

この本は、大学から寄贈をうけ、神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）でも所蔵しています。神奈川に住む多くの方達に手に取っていただきたい一冊です。